

『井波と連句』

平成二九年四月二六日

於 ロータリークラブ

一「全国連句いなみ大会」について

第一回全国連句いなみ大会	平成五年七月二・三日	黒髪庵・瑞泉寺虎の間
国民文化祭とやま96	平成八年九月二八・二九日	黒髪庵・瑞泉寺虎の間
第二回全国連句いなみ大会	平成一二年七月八・九日	黒髪庵・瑞泉寺虎の間
全国連句いなみ大会05	平成一七年七月三・四日	黒髪庵・瑞泉寺虎の間
全国連句いなみ大会09	平成二二年八月八・九日	黒髪庵・瑞泉寺虎の間
全国連句いなみ大会13	平成二五年八月三・四日	文化センター・瑞泉寺
全国連句いなみ大会17	平成二九年九月九・十日	創遊館・瑞泉寺会館

二 元禄の頃

柊の花のこぼれや四十雀
浪化
林紅
ことしは別而柿の大なり
嵐青
人寄の散れば淋しき有明に

葉がくれをこけ出て瓜の暑き哉
去来 元禄七年（入門記念三つ物）
浪化
芭蕉
野松に蟬の鳴き立つる声
芭蕉
歩荷持ち手振りの人と話して

鶯に朝日さす也竹閣子
浪化
去来 「となみ山」酒堂 芭蕉

元禄八年頃、芭蕉追悼の百韻・五十韻、歌仙、句寄せ等多数。

当時の井波の主たる連衆名Ⅱ林紅、基継、嵐青、路健、夕兆、呂風、荻人 白亀、陸史 等々
折ほどハ折おほせたり梅の花
御

柳の間をわたる橋音
浪化

きさらぎや御番の鍛冶のつれ立て
芦葉（石動）

物かるがると薄着してけり
宇白（石動）

川舟の浅ミにすわるくれの月
基継

問屋の場（にわ）のせばきくり綿
嵐青

しつらひハ旅のやうなり魂祭
浪化 草まくら有その稲穂たむけ哉 杉風

さざ浪や井波にかはる墓参り
支考 野ざらしの露よしぐれよ剃髪塚 樗良

三 浪化以後

元禄十六年浪化追悼歌仙

霜の夜や木に離れたる猿の声
林紅 半眼に花の面かけくりかし 嵐青

この鐘さゆる山里の冬
路健 十万億の春の鶯 荻人

安永三年 樗良・蘭台

道々は時雨を照らす柿の色
樗良 壁のすきまに菰かけておく 蘭台

山辺の霜は袖に払はん
陸史 詠への矢の根を月の夜に研ゲリ 太乙

思ひ入る夕べに草の庵建て、
畝波 昼は芙蓉のかげに酒飲ミ 左丈

四 幕末から明治

板倉嵐江、泉沢北英、宇野霞条、宇野樹峰 大谷美杉 宇野井里、有尾、陸平 等々
老るほどにはふや松の深みどり（美杉）

明治十五年浪化百五十回忌、芭蕉堂建立 追善脇起百韻十五十韻

薄柿の匂ひもかろし麻頭巾 応真院殿（浪化）

広きいつみにうつす俤 普行院殿（十七代住職）

松の風樹くの雪を零すらん 梅通（京の宗匠）

杣を案内にこゆるちか道 有尾

五 大正から昭和にかけて
明治二十五年 芭蕉二百回忌追善正式俳諧百韻 大谷美杉 他

志田素琴主宰「東炎」同人等の句集『霜花』 大谷句仏 宇野伯里、竹里、田村蔭花

芭蕉翁・浪化上人二百五十回忌 脇起俳諧之連歌 昭和一八年一月八日

初時雨猿も小蓑を欲しげなり 芭蕉翁 鶏塚に耳あて、聞くいとかかな 浪化上人

冬の構に立直る庵

松蘿

月影したふ露の古道

珠女

句稿編む自序自跋に筆とりて

大化

菊合余眞の連歌抄りて

砂丘

使する子のも言葉美し

久芳

點出しの茶を順にすゝめる

灯加

待つた甲斐あると讃へるけふの月

満花城

印籠の時絵ちらつく薄羽織

蘭母子

作りこなせと色替へぬまつ

芦湖

鞍のいきれをさます青東風

泉水

ウ 渡り来て人馴れ早き四十雀

鳴石

其智恵は今太閤の名に恥ず

考林

よい齡しても止まぬ垣間見

碧外

生さぬ仲とは見えぬ看病

仲陰

家移りの因を糺せば愀氣から

如薰

憂苦労重ねて持った新所帯

鳩歩

ほこりの立たぬ加茂の涼風

木曾路

立ちながらも飲む酒は格別

宗意

時節柄棄てるに惜しき料理屑

華邨子

冬枯のすそ野を急ぐ裸馬

北水

医者指図に皆が納得

梨聲

何を見當か外れ箭それ弾丸

鶴雲

兎にかくに見處先に決める月

克政

雲脚は最う月代に間もなく

幽溪

硯の海を飛び越えるむし

嵐溪

紫芋茎絵の胡麻煎る香敷

如影

そゝろ寒錢湯に遠き寺かりて

輝秀

糶を済まさぬうちは旅もせず

一步

由緒話に長尻の客

吐峰

十徳着るにまだ早い齡

五六屋

花の雲湧くかと思ゆる池の面

香林

筋壁の塀に照り添ふ花の影

園

写真機据る系遊の中

冬星

共同椅子のあかぬ長閑さ

五六屋

ナオ 手習を仕懸る八十八夜から

翠山

鞆の津へ鯛を見にゆく春の暮

〃

三人寄れば論はまちまち

素史

寺へ預ける留守の戸の鍵

一步

どうしても勝たねばならぬ此の戦

霞畝

碁は勝と見越して例のきたな口

幽溪

泣いて別れた夢の恥し

〃

給仕は知らぬ小笠原流

翠山

移香の残る羽織を質に入れ

如影

蒸し風のしみ込む肌をみがき立

園

立喰そばに犬も御相伴

一步

厠を借りて謎の〇解く

松霰

一時に一年半の厄はらひ

五六屋

涼しさに波かと聞けば琵琶の音

鶴雲

神棚買ふて昼も灯ともす

松霰

無礼講許す凱旋の宴

鶴雲

膝に乗せ肩に乗せる子は寶

橘園

何事も助役まかせの隠居役

北水

瓢の値付けは甚五郎の作

冬星

米の供出を譽られにけり

仲陰

城の月鈴瓦に照り渡り

芦湖

月遠く船は次々港入り

考林

此処を先途と轡虫啼

橘園

錢五の像の空渡る鷹

如影

ナウ 穂芒に顔撫でらるる四年籠

菊園

隣にも拔菜交りの団子汁

素史

故郷に錦飾る分別

鶴雲

伊勢参宮の話まとまる

東浪

古釘も無駄には出来ぬ世智辛さ

翠山

竹筒に貯めた小錢も侮れず

斗九

こぼれた酒を手の平にぬる

松霰

育ての親の慈悲も中々

登代墨

苔むした碑仰ぐ花の影

霞畝

雲と化す香の煙も花盛り

香林

殊勝なり希利蝶の拌み羽

執筆

越の井波の水温むあさ

執筆

宗匠〓香林

執筆〓園

香元〓珠女 知事〓橘園

坐配〓芦湖

六 平成になつて

富山連句協会、いなみ連句の会 発足 （志田素風 二村文人 山本秀夫 吉藤一郎、